

やさしい日本語

留学生別科長 虫賀 文人

留学生の教育に携わるようになって、「やさしい日本語」という言葉をよく耳にするようになった。かつて、1996年から放映されたNHK教育TVの外国人向けの日本語講座のタイトルにもこの「やさしい日本語」という言葉が使われていた。この番組は外国人が日常生活に役立つ日本語を学ぶための講座であり、ここでいう「やさしい」とは「易しく学ぶことができる」という学ぶ側からみたものであった。一方、教える側からの「やさしい日本語」とは、外国人のために「日本語を優しく使う」という意味になる。

後者の「やさしい日本語」という言葉は、阪神淡路大震災をきっかけにして普及してきた。当時、日本にいた外国人の多くが日本語の情報を十分に理解できなかったために、適切な行動がとれず二重に被災してしまった。そこで、災害発生時に、日本語が不慣れな外国人に素早く情報を伝えることを目的に考案されたのが「やさしい日本語」であった。これをきっかけに、日本語の難しい言葉を言い換えるなどして、外国人にもわかりやすい日本語を使おうという動きが始まっていった。

外国人が理解できる日本語に自分の日本語を調整するということは、決して外国人に譲歩するというのではなく、多文化共生社会の実現に向けて必要なことである。また、「やさしい日本語」は、子どもや高齢者、障害者とのコミュニケーションにも非常に効果的なツールの一つであり、インクルーシブ社会の実現に欠かせないものでもある。

今年度は新型コロナウイルスの感染拡大により、本科でもオンラインの授業を余儀なくされた。それまでとは違う授業スタイルの中で、多くのとまどいや困難が積みまとった。対面での授業であれば簡単にできるはずの意思疎通をうまくとれないこともあった。こうした状況の中であれば、なおさら、この「やさしい日本語」を使うという考え方は役立つはずである。今回、オンライン上で授業内容を正しく伝えるために、わかりやすい言葉を使ったり、やり方を変えたりしたことは、私たちが自分の授業手法を改めて見直すよい機会にもなった。

本紀要には、「やさしい日本語」に限らず、日本語教育や日本語学を学ぶための数多くのヒントが盛り込まれている。ぜひ、ご一読いただき、すべての人にやさしい多文化共生社会を実現するための一助にさせていただきたいと考える。言葉も心もやさしい社会の実現に努力する中で、コロナ禍という人類に与えられた最大の試練を乗り越えられる日を夢見たい。